

新春座談会

鶴岡の 未来に向けて

合併から10年がたち、
本市はまた新たな一歩を踏み出しました。
これからを担う若い世代の方々は、
鶴岡にどのような思いを抱き、
どのようなことに取り組んでいるのか。
鶴岡の未来について語っていただきました。

鶴岡に感じている

市長 明けましておめでとうござい
ます。

一同 明けましておめでとうござい
ます。

市長 本市は昨年十月一日に合併・市
制施行十周年を迎えました。少子高齢
化に伴う人口減少や地域経済の活性化
などの課題はありますが、全国的に見
ても本市は、地域の皆さんが生き生き
とまちづくりに取り組んでいる所の一
つだと私は思います。各地域で受け継
がれてきた伝統や文化、自然、産業。
これらは全国・世界に向けて発信でき
る大きな財産であり、合併によるスケ
ールメリットがこれらにも表れている
ことを実感しています。

土岐 私も合併のスケールメリットを
感じています。樺引地域の黒川能や温
海地域の山戸能、山五十川歌舞伎など。
合併までは隣の町のすばらしいもの
と受けていたのが、今は自分たちの市
のものとして受け止めています。平野、山が
あり、海がある。全てが私たちのフィ
ールドになっていることも誇らしく、
合併してよかったですと思います。

伊藤（麻衣子） 庄内の人を表すとき
に「沈潜の風」という言葉があります
が、私が鶴岡に来て、それを最初に目
の当たりにしたのは子供の運動会です。
当日までの準備も含め、ふだん穏やか
な方たちが見せる爆発的な団結力に、

とても驚きました。

ヤマガタデザインの取り組みの中で、
私が主に担当しているのは、子供の学
びの場を作るプロジェクトです。鶴岡
の文化を受け継ぎ、今までにない形の
教育システムを作りたいと考えていま
す。あの団結力がある皆さんに協力を
していただけたい、すばらしいものがで
きるのではないかと、わくわくしてい
ます。

市長 「沈潜の風」とは、「常には静か
に地道に力を養い、いざという時には
それを大いに発揮する」気質のこと。
このような気質を持つ先人が伝統や文
化を守り発展させることで、鶴岡の歴
史は作り上げられてきました。そして、
今も市民の皆さんがその気質をしっか
りと受け継いでいるのだと思います。

鶴岡の魅力を知る、伝える

吉宮 鶴岡青年会議所（J.C.）では、
磯釣り大会を開催し、先輩と後輩で対
決しています。釣りをしながら、鶴岡
の磯釣りの歴史や庄内竿についてなど、
先輩からいろいろな話を聞くことがで
きます。初めて知ることあつて勉強
になりますし、面白いですね。

磯釣りのように、鶴岡には豊かな自
然があるからこそ感じられる魅力や、
昔から続いている文化があるのだと思
います。ただ、それを認識したり、肌
で感じたりする機会が、特に若い世代
にとって少なくなっているのではない



右から、土岐彰氏、伊藤麻衣子氏、榎本政規市長、吉宮哲史氏、伊藤由紀子氏

[参加者]

吉宮 哲史 氏

公益社団法人鶴岡青年会議所理事長

ツルカンシステム株式会社を経営しながら、同会議所2015年度第49代理事長を務める。赤川花火大会、わんぱく相撲の主催等、地域政策や青少年育成を基盤として活動している。

伊藤 麻衣子 氏

YAMAGATA DESIGN株式会社取締役

慶應義塾大学先端生命科学研究所等が立地する鶴岡サイエンスパークの開発を手掛ける同社で、主に子育て・教育の分野を担当している。平成26年8月に本市へ移住。愛知県出身。

土岐 彰 氏

出羽三山精進料理プロジェクト代表

羽黒地域手向地区で旅館・多間館を経営しながら、同プロジェクト代表を務める。イベントへの参加や研修を通して、精進料理を中心とした観光振興・地域づくりに取り組んでいる。

伊藤 由紀子 氏

農業委員

平成11年、実家がある朝日地域熊出地区へUターンをし、その後就農。水稲、山ブドウ、柿、サクランボ等を栽培している。また、農業委員会では他の委員とともに食育に取り組む。

榎本 政規

鶴岡市長



吉宮 哲史 氏



伊藤 麻衣子 氏

でしょうか。もっと「知る」「伝える」という動きができればと思います。
伊藤（由紀子） 私は、昨年の稲刈りのときに、初めて杭掛けで稲の天日干しをしました。小さい頃はよく見掛けられた杭掛けの風景が、私の父親世代がいなくなったら途絶えてしまい、見られなくなってしまうと思ったのです。「朝日へようこそ」と「ここにはこんな風景がありますよ」というPRの意味も込め、大きな道路に面した田で行いました。昔からの農業を学ぶ良い機会になりましたね。

土岐 私たちのプロジェクトでは、歴史ある出羽三山精進料理を正しく受け継ぎ、イベントへの参加などを通して、精進料理とその背景にある出羽三山の歴史や信仰、文化を国内外に発信する活動をしています。鶴岡市のユネスコ食文化創造都市の認定では、「食」そのものだけでなく、食の背景にある歴史や文化、人々の取り組みも評価されたということ、私たちの活動の方向性は間違っていないかと感じています。
市長 昨年十月、本市が出展したミラノ国際博覧会で、鶴岡の食文化はとて高い評価を受けました。これは、土岐さんがおっしゃるように、地域の伝統や精神文化に裏打ちされた奥深さがあったから。また、生産者をはじめ、在来作物等の保存・研究活動を行う山形大学農学部や慶應義塾大学先端生命科学研究所等の高等教育機関など、多くの方の取り組みによって支えられてきた食文化の魅力が伝わったからだと実感しています。
由紀子 ユネスコ食文化創造都市の認定は、農業をしている私にとって励みになっています。鶴岡の食文化が世界に認められ、その一端を担っているという自信にもつながっています。これからの農業においても、PRや情報発信が重要になってくると思うので、その方法を考えていきたいです。

人口減少を考える

土岐 どの自治体にも当てはまることですが、将来を考えたとき、人口減少が心配ですよね。対策の一つとして交流人口の増加があり、それに寄与するのが観光だと思います。ただ、単なる人口増加や大きな経済効果だけでなく、精神的・文化的な交流も大事だと私は考えています。

出羽三山には連綿と続く山岳修験があります。今もなお手向地区では山伏が宿坊を経営し、羽黒山に行けば、装束を着て修行する山伏がいる。外国からは特にヨーロッパの観光客が多いのですが、この今も続く歴史に触れられることを大変喜びます。また、宿泊先のスタッフと積極的に交流したり、地元住民が庭先で山菜を干す様子など、何げない風景にも興味を持つたりします。その地域にあるものを「体験したい」「共有したい」という気持ちが大きいんですね。私も刺激を受けています。これからの観光は観光客をどう巻き込むかが鍵となるのではないのでしょうか。

麻衣子 観光の分野でいうと、エデュ

ケーショントリップ（教育旅行）の取り組みを考えています。視察で東京の保育園などに行くと、園庭がなく、プールを投げた土を触って遊ぶ、ボールを投げる場所もないという環境の園があり、びっくりすることがあります。本来、子供は遊びの中から生きる

力を学ばずなのに、それが難しい。視察先で私たちの取り組みを話すと、「鶴岡に子供を連れていきたい」とよく言われます。「生活の基盤は東京に置かなければならないが、豊かな環境の中で学ばせてあげたい」と考える親御さんが多くいらっしやるんです。そういういた方々をエデュケーショントリップで鶴岡に呼ぶことも、鶴岡のPR方法の一つだと思います。山・川・海・里が全てあり、出羽三山のような地域に根ざした伝統・文化もある。鶴岡では子供が学ぶべきことを学べると思うのです。

吉宮 観光振興に取り組む中で、注意しなければならぬこともありますよね。例えば、観光地におけるごみ問題など。観光を誘致することが悪い方向につながってほしくないですし、やっぱり鶴岡の豊かな地域資源を崩すようなことはあってはならないと思います。**土岐** 持続可能な観光は、観光客の満足度、観光業者の経済的な満足度、そして地元住民の幸福度の三つがそろわないと実現しないといわれています。私たちも三つ目を大切にしながら取り組んでいきたいですね。

吉宮 赤川花火大会の開催目的は、一つが観光の誘致です。もう一つは、この大会が家族の触れ合いの時間となることです。昨年で二十五回目を迎えた赤川花火大会。一度開催が途絶えましたが、平成三年、JCが中心となって二十七年ぶりに復活させました。復活

の裏には、「自分の子供にも花火を見せてあげたい」「県外に出て行った子供たちが地元に戻ってくるきっかけにしたい」という思いがありました。

その思いに今も変わりはなく、花火を見ることで、家族一緒に仲良く過ごしてもらえればと、市民の皆さんのご協力を頂きながら、大会を運営しています。これからも、鶴岡の魅力の一つとして情報を発信し、目的を見失わずに取り組んでいきたいと思っています。

由紀子 私は、「鶴岡に帰りたい・住んでみたい」と思う方の移住・定住を促すために、「雇用の場の確保が重要だ」と思います。「地元に戻ってきたけど、正規雇用の仕事に就けない」「帰りたいけど、仕事が見付かるか不安だ」という話を周りでもよく聞きます。仕事がないければ生活は成り立ちません。私は個人で農業をしています。今年、法人を立ち上げることを予定しています。農業を「家業」という位置付けから「企業」という位置付けにしたのです。農家の生まれでなくても「農業をしたい」と意欲のある方に、農業に携わる機会を「仕事」の形で提供できればと考えています。

市長 農業法人は、地域農業の担い手として、また新規就農の受け皿として、雇用の面でも重要な役割を果たしています。複合経営や六次産業化など、農業には様々な可能性がありますので、市にも相談していただきたいです。本市としても、移住・定住を促す上



で、雇用の場の確保は重要な施策だと捉えています。昨年十一月、鶴岡南高校が市等と協力し、同校生徒を対象とした企業説明会を初めて開催しました。地元企業を知ってもらい、地元での就職を選択肢の一つとして考えてもらうために、今後はこのような機会を設けていく必要があると考えています。

子供たちに対する思い

麻衣子 ヤマガタデザインが進めているサイエンスパークの開発は、平成三十年の完成を目指し、「産業」「交流」「子育て」の三つのエリアで構成される施設を一体的に整備するものです。私は子育てエリアの教育施設の整備に携わっています。



土岐 彰 氏



伊藤 由紀子 氏



榎本 政規 市長

その中で参考にしたのが、致道館の教育です。致道館の教育は、「自学自修」であり、先生は生徒に答えを与えず、手掛かりを与えるだけ。また、生徒一人ひとりの個性を重視して長所を引き出すという教育でした。この方針を継承し、鶴岡の豊かな地域資源を生かすことによって、他にはない教育施設を目指したいです。そして、子供たちが自然や生活の中から学び、協力し合う心や諦めない心を持てるよう、支援していきたいと思っています。

吉宮 毎年JＣでは、小学生を対象にわんぱく相撲を開催しています。子供たちは強くなるために体を鍛えるだけでなく、礼儀作法を身に付け、勝った人をたたえ、負けた人を思いやる心を育むために心も鍛える。相撲から心技体を学び、実践しています。次の年には更に成長した姿が見られ、感動します。「子供は親の背中を見て育つ」という言葉がありますが、子供たちを見て

いると、私たち大人は学校や家庭、地域との関わりの中できちんとした背中を子供に見せていかなければと実感します。そのためにも積極的に関わりを持ち、自分も成長していきたいですね。**由紀子** 熊出地区の夏祭りは、私と同世代の住民が取り仕切っています。大人のほかに中学生や高校生、この日に合わせて進学先から帰ってきた子どもスタッフになるところが特徴です。小さい子供や、おじいちゃん、おばあちゃん、親戚をもてなし、子供たちも主体的に地域に関わっています。**土岐** 羽黒山の松例祭にも、地元の方をはじめ、帰郷した方も参加してくれます。祭りが成り立つのも、このような協力があるおかげです。

地域の活動に積極的に関わる方は、子供の頃から同じように関わってきた方が多い気がします。地域は教育の土台の一つだと思えます。子供が地域に興味や愛着を持つためには、子供と地域をつなぐものが必要であり、それが私たち大人なのだと思えます。**麻衣子** 私も子供たちには地域を愛する心を育ててほしいです。親や先生、地域の方などが、自分の住んでいる所への誇りや、すばらしいものを「すばらしい」と伝えることで、子供たちも鶴岡を愛し、「鶴岡はどんなまちなのか」「なぜ鶴岡を好きなのか」を自分の言葉で表現できるようになる。その子供たちが大人になって自分の子供に伝える、また、鶴岡をPRしていく人になってくれればうれしいですね。

若者が元気な地域に
市長 皆さんをはじめ、地域の宝に光を当て、一所懸命に取り組んでいる方が多くいらっしゃることを大変うれしく思います。これからの地域づくりは、社会教育や生涯学習も含め、人口減少や少子高齢化、教育、福祉、防災など生活全般について、地域ぐるみで考えていかなければなりません。未来を担う若い世代の方々には、ぜひ様々な分野で生き生きと活動していただきたい。それをバックアップしたり、環境を整備したりするのが行政の役割だと考えています。やはり、若い方々が元気だと、周りも元気になる。地域全体の活性化につながります。

歴史、文化、自然、なによりもここに住む方々が本市の財産です。これからも、市民・地域・行政の総合力で、一人ひとりが誇りを持って暮らせる地域づくりに取り組んでいきたいと思っています。そして、本市のめざす都市像「人くらし自然 みんないきいき心やすらぐ文化をつむぐ悠久のまち鶴岡」の実現と、明るい将来に向けて歩みを進めていきます。皆様のお力添えをよろしく願います。本日はありがとうございます。**一同** ありがとうございます。